

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

中世農民の身分的制約--中世イギリス身分法史の基礎構造分析

著者	荒井 貢次郎
雑誌名	東洋法学
巻	3
号	2
ページ	71-101
発行年	1959-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007782/

中世農民の身分的制約

——中世イギリス身分法史の基礎構造分析——

荒井貢次郎

目次

序	説
I	隷農制度と奴隷制度との比較
II	Domesday Book と <i>servi</i>
III	奴隷解放と <i>freedmen</i>
IV	<i>coltarii bordarii</i>
V	<i>villani</i> と <i>coltarii</i> との重要な相違点
VI	<i>villani</i>
VII	<i>villani</i> の身分
VIII	<i>socmen</i> と <i>liberi homines</i>
結	言

中世農民の身分的制約

序 説

中世イギリスにあって、隸農制度 (villainage, villeinage, serfdom) という厳しい制約の下で、絶えずもうもの「経済外的強制」(ausser Ökonomischer Zwang) (1) におよびやられながらも、農民労働の中核的担当者たる層を形成したのは、土地に束縛された隸農農民 (不自由民) つまり villani, cottarii, bordarii, servi たちである。

隸農農民と支配層という二つの主要な階級に対して、むしろ、傍觀者的役割を勤めたといえるのが、自由民 (liberi homines) や半自由民 (soremann) なのである。この層は、農村における全人口のうち約一二パーセントを占めているにすぎなかった(2)。

以上の諸農民層の中世における労働構成の身分的制約につき考察し、中世イギリス身分法史の基礎を理解するのに資したいと思う。

(1) 封建社会に特有な「経済外的強制」という範疇は、villainage との関係を考える場合には欠くことができない規定である。

villainage による諸条件の下では、領主 (lord) が、農民から受取る地代は、農民の土地保有に対する反対給付、つまり土地保有の実現ということになる。この状態を領主が確保するためには、領主側からする封建的強制が必要となる。この場合、農民たちは、その保有している土地に、自分で所有している農具を使用し、独立した耕作をしている、しかし領主は土地・自然といった農業生産には欠くことのできない、最も基本的な生産手段を排他的に所有している land-owner (土地所有者) の地位に立っているのに対し、独立生産を営む農民は、land-holder (土地保有者、土地用益権者) に過ぎない。こうした農民から領主は、地代の形態で、しかもしばしば現物地代ではなしに、労働地代 (賦役) の形

態で収取してゆく。そこで、領主は、自己の土地所有を経済的に実現しようとすれば、中世権力の一端を担った領主権力をもつてする「強制」が必要となってきた。ここに、領主的「強制」が封建社会の特有な一範疇的性格をもつ理由がある。

(2) シーボウム (Frederic Seebohm) は、人口の階層別比率を次のように示している (F. Seebohm, English Village Community, p. 85, map.)。

<i>Sochmanni</i>	8%
<i>Liberi Homines</i>	4%
<i>Servi</i>	9%
<i>Bordarii, Cottarii</i>	32%
<i>Villani</i>	38%

1 隷農制度と奴隷制度との比較

公法および私法(民事法)における隷農 (*villani*, *villain*, *villein*) の状態。つまり、*villani* としての身分のなかに入り込んでくる奴隷的状态の程度は、中世の *villain* (*villani*) と古代の *slave* (奴隷) とのそれぞれの身分を対決することによって最もよく理解できよう。

slave を概念規定して、*slave* とは完全に何んらの法律上の権利も享有できない人間であって、その主人すなわちその *slave* を動産(有体財産)として所有する者に、その *slave* の生殺与奪の権能が握られ、*slave* は、法律上の人格がなかった。しかも、*slave* 自らが所有できる固有の財産というものは一切認められなかった。

中世の法律学説では、serf (villain) 状態と slave 状態とは同じに扱い、法律家も、また中世の隸農制度(villainage)と古代の奴隸制度(slavery)とを同一視していた。

Azo の見解を受け継いだ Bracton (1) は、すべての人々は、aut liberi aut servi すなわち freeman と slave とのどれか一つの範疇に属すると述べている(2)。

領主に相對する villani は、たとえ、法律では、villani の生命、身体の保障が与えられても、ほとんど、または全面的にそうした権利は主張できなかった。というのは、生命、身体は国王の保護するところにして、また市民権によって制限を受けるので、villani をその支配下におく領主権は主張できなかったと Bracton は述べている(3)。

ところが Dialogus de Scaccario (4) の立証によると、「領主は、ascriptum (土地に隸属する農民＝農隸) の財産・身体所有者であり、その領主は、自己の任意の土地にそれを移転することができ、また売買、譲渡もできる」ことを明らかにした。こうした点は、Glanville も Bracton も別の論著において認めている。Glanville は、

All his belongs are in his lord's power.

と(5) Bracton も

Whatever is rightfully acquired by the serf is acquired for his lord.

と述べてこれに同意している(6)。ひたすら villani は Common Law の法域の域外に立つことになる。

要するに、領主は、法律学説上 villani に対し無制限の権利を享有できたとしても、さて、現実はどうであったろうか。事実は逆であって、広汎な背反が行われ、法的概念と抵触していた。これこそ、中世イギリスの villani

(serf) ヲトクセム・トの slave ヲの間の重要な相違なるにあらん。

ウィリアム・アズレーの記述(2)なる提議を賛成する。すなはち

The whole organisation of agriculture, that is to say the organisation of by far the larger part of the economic activity of the time, was we may fairly say, based upon "serfdom". The word "serf" is, of course, a mere Englishing of the Latin word for slave, viz. *servus*. But "serfdom" means something very different from "slavery" to a modern ear, and quite properly. (筆名トヘンダー・ホーレン)

と云ふ、可なり。

We mean by it a condition of dependence, in which the dependant was bound to the soil and subject to onerous burdens, but in which, whether technically "free" or not, he enjoyed an independent home life, and could not be sold away from his family and his holding; and in which, also, he possessed rights of property, at least in such movable wealth as he might acquire by his labour.

と云ふことなり。

結局、serfdom (villainage) は、slavery と自由の狀態との中間的位置におかれる。大雑把に云つて、古代ギリシヤ、ローマの世界では、それらの社会は slavery に依存したものであり、それに比べて、近代社会は、個人の自由契約 (free contract) と個人の自由に立脚するを考へれば、中世の serfdom (villainage) は、古代よりも一歩前進した形態と見てよいことになる。

II Domesday Book⁽¹⁾ の *servi*

村落社会 (village community) の成員とその諸構造につき究明するためには一〇八六年にできたイギリスの Domesday Book (土地調査台帳) は、西ヨーロッパの諸国にその類例を見ないくらい広範な調査であって総合的な数字統計が見られる、優れた調査、たとえ、正確さを欠くものがあったも、なお、研究上優れた基準を与えるものといえよう。そこでこの Domesday Book により *servi* を考察して見よう。

villani 階級を構成するための諸要素のうちの一部分は、古代の slavery から続いている。それは、古代イギリス時代の *theuus* または *esnes* からの系譜をもつ。しかも比較的数字少い *servi* だけは Domesday 調査に記述がある⁽²⁾。そして *villani* 階級から区別される *servi* の階級は、十三世紀の記録からは、その姿を消している。この事実は極めて重要であって、注意して考察する必要がある。

シーボウム (Seeborn) が指摘したように、Domesday Book に記載されてある人口の約九%は *servi* であって、しかも manor の社会階層のうちでは最も隷属度の強い階級であった⁽³⁾。

Saxon 時代の奴隸解放は、しばしば行われた。借金の返済、特に奴隸所有者が、遺言によって解放した *servi* が数百人にも及んだ例がある。Domesday Book に記載されている *servi* を、目立たない規模で、温存させた奴隸制度に対して、これを衰退させるのに一役を買ったのは、キリスト教の博愛精神でもなければ、その影響によったものでもなかった。だが、確かに *servi* の取扱について、多少とも人道的な要素を注入したキリスト教の考えの基本に

は、*servi* にも、一般の人間と同じような靈魂が宿っているという点にあって、これを世人に認識させたのであった。宗教會議はもちろんのこと、牧師の説教でも、*servi* は、とにかく神の恩寵は受けている。けれども法の保護という点では、全く埒外におかれている憐れむべき人々の群のこの世にあることを自分たちも認めなければならない場合を留保していた。キリスト教は奴隷制度廃止には積極的働きかけをすることなく、むしろ *servi* に対しては、あくまでも主人に対する柔順を説教した。こうしたことは、キリスト教団それ自らが *servi* を所有した事実との妥協を有利にすることにあつたといえよう(1)。

古代イギリス法の規定で、奴隷制度が明白に示され、それが封建社会で衰退した理由は、社会的・経済的考察にまつことが最良の説明を求められる方法であつて、宗教的・人道的考察では、納得できるような説明が求められないのではあるまいか。いや、反対に、それでは、隷農制度は、廃れるどころか、むしろその範囲が拡大され、そうした制度が発展していくことにもなつたろう。一般にいつて、*villain*, *serf*, *native* の名称で普及し、前代の *slavery* を伝承し感染を受けている。

villani は売買の対象(客体)とされた。が、また自由解放の道も開かれていた。隷属的身分の存在が、社会的に認められることにより、こうした身分に一般の自由な人々が転落する場合が加わり、その制度的弊害が普及しはじめ、階層的交流と混乱がもたらされた(4)。

こうした類型の他の一側面に浮び出してくるのは、やはり極めて低い身分(賤民)にある *servi* の消滅という事実であらう。重苦しいような法的措置が、法典、判例、調書というようなもののうちに跡付けられてある。最も賤しい身分に

ある隷農層としての生活に追い込まれ、賤しまれた賦役を課されていた。その賤役の例として清掃夫役が課された。しかし、その賤役別の階層を賤民層のうちに成り立たせるほどの頻度はなかった。*servi* に対する法は、*villani* に対する法が一般的には適用されていた。

Domesday Book のなかにある *Burton* 記録に登場する *servi* は、古代イギリス法における奴隷制の残滓ということが出来る。なお、*servi* と並んで現われてくるのが *Domesday* 調査で捕捉されている *ancillae* である。こうしたことは、土地保有 (*holding*) と関連してこないが、*demesne* (直轄領) の記述を研究すると直面するであろう。ここにいう *ancillae* とは、マナフ裁判所の管轄区域のうちに生活し、*manor* の *steward* が直接に支配できる農業労働者、つまり私的な *fondman* なのである。

vovarii は、*villani* の系譜に入れてもよいであろう。同じく *demesne* の領民である *vovarii* と *ancillae* とを同一視することは適當ではない。これ以外の領民に惣組の御者には入らないが、領民でも不自由民のうちにいる *servant* がいる。

とにかく *servi* は、たまたま *Domesday Book* に収録されてはいるものの、土地保有とは無関係で、この階層が書き込まれているが、その書入れが不完全であったと推定できても、その人口は、ほんの僅少である。たゞ推論をしてみれば、比較的数量多くの *servi* が、西部の地方にある *manor* にはあるが、中部地方では、それよりも数少くなり、さらに東部地方になると、まったく僅かしかない。イングランドの諸階級のうちで、この層は、次第に消え去ろうとしている。西イングランドの地方に存在した多数の *servi* は社会構成上重要な意味をもっていた。しかもこの層

は、被征服民が大多数を占めていた。

だが、*servi*の社会的状態は、不安定にしてその地位は、史的にみて悲惨であった。なにはともあれ、*servi*は領主の家庭に雇われていたに違いなからう。

一〇八六年、*servi*は、消え去りはじめた。おそらく、それらは *bordar* 層に吸収されたろう。これらの人口分布の変化はノルマン・コンクエストにもなう最も顕著な結果の一つなのである。奴隷制度から隷農制度へと向う経路は *servi* を土地に定住させ、土地を与えることから始められ、それらの人々は、典型的な農民の賦役その他の奉仕が強制的に覆さって来た。

(1)、(2) Maitland, 'Domesday Book and Beyond', p. 3. cf., Vinogradoff, *English Society in the Eleventh Century*, pp. 219, ff.

(3) Lipson, 'Economic History of England', vol. I p. 49.

(4) Round, *Feudal England*, p. 44, Maitland, *Domesday Book and Beyond*, p. 11.

Ⅲ 奴隷解放と *freedmen*

中世イングランドの *manor* のうちにあつて古代の奴隷の残存である *servi* が中世において、どんな運命をたどらされたかを考えてみたい。

個人的に奴隷の身分を消滅した事実と関連し、農業奴隷の集団解放であるところの「奴隷解放」(1)の結果とその特徴における大きな変化がある。

freemen への解放は、奴隷制度が盛んであった地域では、つねに極めて重要な意味がある。すなわち *freemen* (解放民) 層は、すべての法的権利と人格をもたない *servi* と完全自由民 (*freemen*) との間を結ぶ中間的一環である。新しく解放された *freemen* は、解放された後でも、なお、以前に仕えていた主人の下に残存していた。

freemen の残存者は、*coliberti* (2) にみいだせる。フランスでは、この例はしばしばみいだせる。が、イギリスでは、その例が少ないのは、フランスの慣習と用語の適用上から明白なのである。これらの人々は、集団行動により自由を勝ち取った人々である。しかしこれは、あくまでも例外的であろう。一個人の解放は、しばしばあったが、自由解放された人々の状態には大きな変化はなかった。

(1) Vinogradoff, *The Growth of the Manor*, pp. 335-6.

(2) Dd. i., 38. b (Brestone); ... *In dominio sunt 2 carucae, et 11 bordarii cum 4 carucis et dimidia. Ibi. 4 coliberti et 3 molendina. ... In eodem hundred est Dene quae adjacet huic manerio. De isto manerio (Brestone, and not Dene, as Ellis thought; "Introduction", i., 35) habetur in Wallope 5 villani et unus, et unum rachim de 30 denaris, et 2 carucae in dominio, et coliberti (et Bures), ut supra, redunt consuetudinem aliorum. It is evident that coliberti rendering the rest of the dues are the four mentioned in Brestone. They are connected with demesne land, as the serfs in other instances, and the gloss buri, geburs-describes them as agricultural labourers. According to Ellis's abstract, 858 coliberti and 62 boors are mentioned in "Domesday".*

(3) *coliberti*

coliberti の身分がどのようなものかについて論及している幾多の学者の労作があるが、なお、異論がいろいろ多い。しかも史料の不足によって決定的な解決が期待できないが、一応の見通しをしてみると、中世フランス農民関係文献、例

えは、修道院の cartulaires や polyptyques などには「しばしば」*coliberti* といわれる人々の記録がある。*coliberti* を別に *coliberti*, *corliberti* (女の場合は *tae*) などと語られ、フランス語では *culvert*, *cuvert*, *cuibert* とも記されている。

この語原は、これを古代ローマにゆかのはれる。*cum* (*col*, *con*, *co*) と *libertus* で構成されるのであって、「共に解放された」人を意味してゐる。(Louis Halphen, L'Histoire de Moillezaïs de moine Pierre, Rev. hist. 1908, Sept.-Déc. pp. 290 et sgg.)。

中世文書では、十一世紀以前の *coliberti* は、文書の欠如しているため明らかにできないが、十一世紀には最も多く現われ、十二世紀では、その後半になると早くも消滅している。しかし、その実、自らの身分を明らかに示さずに、なお、しばらくの間は残存したらしい。

coliberti は自由民でも農奴でもなく、しかも一階級を構成した。例えば、一〇六五年の La chapelle-Auge の市場規則では、「自由民であらうと、農奴であらうと、*colibertus* であらうと、法に従つて罰金を払ふべし」とある (Eminent-*abit tantum catalum et talem legem qua vixerit, sive sit liber, sive sit libet, sive sit libet, sive sit libet*. (M.-A. Chazaud, Fragments du cartulaire de la Chapelle-Auge, n.° xvi, p. 35)。

coliberti をヨーロッパ諸国における分布についてみると次のようになる。

- (i) フランス——Loire 河、中流域の地方、Paris 附近。
- (ii) イタリア——イタリア半島では、十二世紀初期に、ただ一つの記録が、ローマ北方の地方にあった (H. Ellis, A general introduction to Domesday Book, 1833, vol. II, pp. 417. et sgg.)。
- (iii) スペイン——スペイン北部にも、まれに *coliberti* とよばれる人々が見られるが、いまだ確実な研究の報告がないから、単にフランスからの移住者によつて伝承された語であらうと推定される。
- (iv) イギリス——史料としては、Domesday Book だけに *coliberti* が現われている。Ellis の計算したところによると、次の十二州に関する記事に、八五八人の *coliberti* が見られる (Ellis, *ibid.*, vol. II, pp. 417. et sgg.)。

Wiltshire	260人
Somersetshire	218人
Gloucester	103人
Hampshire	98人
Cornwall	49人
Dorsetshire	33人
Devonshire	32人
Berkshire	24人
Hertfordshire	16人
Shropshire	13人
Warwickshire	6人
Warcestershire	6人

これらの *coliberti* は *bures* (bure) ではなく、*burs* (bur) というのは農民と同義語として使われることが、十一世紀の人が書き込んだ行間の記入に於いて明白である (Elis, *ibid.*, vol. I, p. 85. Hampshire の Dene の Manor の記載事項のうち、*coliberti* という言葉が載せられ、その上に、同時代の人の手跡で ‘bures’ と行間に記入されている。(cf. Maitland, *Domesday Book and Beyond*, p. 36. また Ashley は、次のように述べている。

...the entries in the Domesday Survey relative to some few hundred persons described as *censores* or *censarii*, and *coliberti*. (Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*, vol. I, p. 22)

結局、これは、William 征服王が、イングランドを征服した時代に、移動してきたノルマン人が、まだ、征服地の言葉 (土着民語) を解しないままに、フランス語において表現された *coliberti* によって概念規定された農民と類似したイングランド農民のうちの二階層に対し、*coliberti* の名を冠したものと考えられよう。

そして Ellis 氏はその著書のなかのノートで、
...a total of 858 *coliberti* in Domesday, 260 are in Wilts, 218 in Somerset, 103 in Gloucestershire, 98 in Hampshire, 49 in Cornwall, and the rest scattered over the other western counties. Ducange elaborately discusses *Coliberti* with the conclusion that they occupied a middle position between what he calls “*liberti*”, and paid census.

M *collarii, bordarii*

cottager tenant, *collarii* (小屋住農) は、全人口のうちで約三割二分を占めた(一)。これは、やや平均して各地に分散居住して、manor 領民のうちでも比較的下層に属していた。

Domesday 調査では、それらの人々は、調査台帳に、あるところでは *collar* と名付けられたところと略して、別のところでは *bordar* と名付けられた。が、その名は、互いに入替えてみても内容的には少しの変化も生れてこない。

その名称の起源は、Vinogradoff (二) 氏

Most of the expressions employed are Norman-French and Norman-Latin, and the question naturally arises: did they fit in exactly with the English expressions in use before the Conquest, or were they an independent growth of the Norman time to which the older expressions had to conform as they best could. There can be no doubt that the latter was the case. If we leave the cottagers and the

soke-men aside to begin with, as terms which have an English sense. We find that the most important of the terms used, *villani*, *bordarii*, *liberi homines*, are distinctly Norman and do not find any entirely corresponding equivalents in Old English usage.

とあり、そして、*chūn*、

This is especially clear of *bordarii*. The term is a wide generalisation, it covers not much less than one-half of the labouring population of the rural districts described in Domesday.

とある。そして *bordarii* (bordars) は Domesday Book における特有な語として存在した。が、その後、一般用語とならないで消えていった。

さて、ここでは、用語によって把握される実体について検討する必要があるが生れてくるが、それに先き立って、cotters を生む基盤について考えよう。

領主の demesne 経営は *villani* の week-work (週賦役) を基底とする変ることのない労働力にその給源を求めていた。それで、現実には、必要であるかどうかにかかわりなく、いつも、年間を通じてこれら賦役の供給者を確保しておく必要があった。その結果、一年を通して比較的閑散な時期でも、それらの人々は、だいたいする仕事もなく時を過していくのに反し、ひとたび農繁期に入ると、にわかに過重な労働が求められ、労働強化の重圧は加わってくる。こうした慣例は、好悪の別なく、いうところの boon-work (asked work) として制度化されてきた。

農繁期または、ある時期に、領主は、賦役という形態で、農民の労働力を利用し、依存しても、なお、労働力が不

足するようになるとともに、*demesne* や、自らの勢力圏内の地域以外にある労働者を、流入・受容れを行い、労働力不足に対する充足を図らなくてはならない事態に追い込まれる。この例は、東ドイツの場合では、*Sachseingänger* がこれに当る。だが、封建体制での地方分権制、交通の不便・不備・危険などの諸事情は、農業労働人口の移動に多くの障害となり、大多数の場合、その路が阻まれてしまう。かくて多数の地域で、共通な現象は、村落にあつて零細な土地と小屋を給与され、貧窮生活を営み補充的労働需要に応じるため定住する労働階級の層が発生するようになった。この階層こそ、イギリス、フランス、ドイツ、スカンジナビアなどにおいて *bordarii*, *bordiers*, *cottagers*, *husmænd*, *kotter*, *Brinksitzer* などである。

cottarii (*cottager*) の人口は、*villani* 階層からの人口流入のため、数がふえた。つまり *villani* の青年たちが、その供給源であった。そうした現象が発生する原因は、*villani* には、「単身相続」の規則が、領主側の利益のため適用され、犁による耕作の効果を發揮するため、相続の持分から除外された。この他に一つ別な要素が加わった⁽³⁾。それは、領主が、*servi* の耕作民としての身分を改善し、その土地に安定させたことにもよる。これも *cottarii* 化が行われたといえる。

villani に類似した *cottarii* (*cottar*) は *tenants in villeinage* で、法律家の形式的分類操作では、これを単一階級として類別し、領主に対する一般的服従を強制された一つの階級単位として取扱った。実際用例によると、*villani* という用語は、しばしば *cottar* の概念にまで拡張して解釈され、適用をみた。そうしたことが、ますますそれら両者の間に類似がもたらされていった。従って、その区分をする一線は、法的なものではない。*villeinage* (隷農制度)

の法的特徴——precarious tenure、土地に附属する service の強制、隷属的身分——は、*cottarii* の状態に平行していた。しかし、この法的同一性は、大きい経済的重要性をもつ区別をおおい隠した。村落における中心的・代表的集団となっていた *villani* との間に広い差違があった。*cottarii* の物的状態は、かなり低かった。

manor 社会の *villani* と *cottarii* という二つの社会的身分を区別する線は、本質的には経済的なものがあつたと解すべきであらう。virgate 分の耕地をもち牧草地、荒地について附帯的権利をもつ *villani* は、貧困で、なお勤勉家である *cottarii* にくらべて、むしろ一層、本来の農耕民としての面目を発揮したものといえよう。

要するに、*bordarii*, *cottarii* は、*villani* より下位の身分にあつて、大部分の人々は、小屋一軒を住居とし、生活するところのボーダーライン層 (border line class) で、一エーカーまたは二エーカーの耕地を借りていたが、なお、Domesday Book その他の調査報告書によると、五エーカー、八エーカー、十エーカーなどの多くの耕地を保有していたが、これは common field であつた。こうした階級は、牡牛、犁をもたなかつたので、厳密な意味における *villani* と区別され、また *villani* に雇われていたのもあらう。古代英語の *cotman*, *cotter* という語が、ノルマン人によって移されたと考えられる *bordarius* の語に入れ替って用いられたであらうことを附記しておきたい⁽⁴⁾。なお、正しくは、*bordarii* という言葉で規定されるところの人々は、一般に、*cotseti*, *cotmanii* よりも幾分かよい地位にあつたと思われる。ところの、*Liber Niger of Peterborough* 161 に *manor* の *tenant* を次のように類別している。

pleni villani

dimidii villani

colsetes

70. 62' Ellis, Introduction to Domesday, 1833, ii, 511 の表を照るべし

villani and dimidii villani

bordarii

colarii, coleui and coscets

2' Domesday Book の類聚と轉を算出するべし

44. 44' 1) の 2' *Leges Henrici primi* に 44. 45' 2'

villani

vel colseti

vel ferdingi

2' 分類するべし 2' (10) 0

- (1) F. Seebohm, English Village Community, p. 85, map.
- (2) Vinogradoff, The Growth of the Manor, pp. 337-8.
- (3) Vinogradoff, English Society in the Eleventh Century, pp. 460-1.
- (4) Ashley, An Introduction to English Economic History and Theory, vol. I, p. 8.
- (5) loc. cit., p. 50, notes 8. 44. 44' *Leges Henrici primi* 44' Henry I の英轉をみるべし

一〇八、四五六人

八二、六二四人

六、八一九人

V villani と villani との重要な相違点

villani, cottarii とを比較するとき、そこに二つの重要な相違があるところが認められる。

(一) *cottarii* 層の土地保有割合は、*villani* のそれに比較して一層小さい。

土地保有の面積は、一般的には、五エーカーであるが、多いものになると、十エーカーであって、少くとも一ないし二エーカーは割り当てられていたと考えてよからう。

Seeborn (一) は、

There are bordarii holding so many acres each, generally five, but vary sometimes from one to ten. so that、その他に園地 (garden) も保有したと述べている。つまり、次のとおりである。

There are cottarii with all these variations of holding. There are 'bordarii with their gardens' and there are likewise 'cottarii with their gardens'. There are both bordarii and cottarii who, as their holdings are not described at all, may, for anything we know, have held cottages only, and land or gardens.

(二) *tenement* の大ききの減少に比例して、負担 (*obligation*) も少い。そうした *cottarii* の人々は、一週間に一日だけ土地に賦役を課された。通例、その日は月曜日だから、*lundinarii* (Monday man) (2) という名がしばしば使われた。

villani の義務である主な service は、領主の *demesne* に対する耕作であつて、*cottage tenant* からは得られない。それも、これらの人々は、普通、自分の所有に属する牡牛はないから、共同耕作に一枚加わるのを除かれた。

cottarii の村落における社会地位は、他の村落民に比較して下層にあることは、*cottarii* におけるその経済的地位の重要性が隠され易かった。農業労働の需要は、年間を通じ、決して一樣ではなく、季節とともに変化したことは村落生活の一特徴である。

收穫期および例外的な時期に、補助労働に対する需要が加わる。現在、臨時労働は、多かれ少なかれ浮動人口に依存し、それらの人口による service によってまかなわれる。このことは、大部分、土地と分離した社会で実行できる近代的方法である。が、土地に対する觀念が優位にあることが、それぞれ個人を土地の一定の割合により共同させた時代——これこそ封建制度化の特徴で、それぞれの個人は、土地を耕作し、農業生産を行うため土地を保有し、耕作を割当て強制された時代——には、前述のことは可能でなかった。

それだから、*manor* にとっては、経済構造的に、土地の上に定住した非常に数多くの労働階級を抱え込むことが必要であつた。そうしたことによって、それら土地定住者が附加的労働を担ったのである。こうした有利な点が *cottarii* によって与えられた。つまり、これらの人々の労働力は、断えずプールされていた。

もう一つの方向からして *cottarii* を追求すれば、それらの地位が、農地経営の近代化へ向う、先駆をするから、多くの利点がもたらされた。*cottarii* のもつ僅かな土地面積は、明かにその生活を維持するには充分とはいえなかつた。一方、領主への service と *cottarii* 自身、土地保有に対する要求は、この時代では、小さは需要だけしか充足

されなかった。

cottarii の有り余ってしまった労働力は領主の *demesne* や、あるいは富裕な *villani*⁽²⁾ の土地耕作に賃労働することにより、生計をかううじて維持できた。経済発達の初期の段階では、明かに賃銀労働階級の出現を見た。そうした階級は、終に隷農的身分をもつ階級を代襲し、これと取って代わる運命を託されつつ、近代村落社会の基礎的階層を形成していった。

(1) Seebohm, *The English Village Community*, p. 96.

(2) Neilson, *Ramsey Manor*, p. 49.

(3) Vinogradoff, *English Society*, p. 458-9; Maitland, *Domesday Book and Beyond*, p. 41; Vinogradoff, *The Growth of the Manor*, pp. 352-3; Even the villein with a semi-virgate would have to supplement his resources by working for wags.

VI *villani*

Manor における tenant (小作人) たちのうちに包含される諸階級における、社会的に重要度の最も高い階級は、*villani* (villain, villein)であって、その層が内包する人口も、最も多い点に、*Domesday Book* に登録された総人口二八三、〇〇〇人に達する tenant たちのうちで、一〇八、四〇〇人を数え、その調査が行われた一〇八六年で、全人口に対する比率は約三八％となる。各州別に検討すると、最高は、*Yorkshire* であって、百分率では、六三％に達する。なお、最低率は、*East Anglia* で、そのうちで、*Suffolk* にならうと一四％にすぎない。西部や南部イン

グラントの諸州では、だいたい、住民の $\frac{1}{2}$ ないし $\frac{1}{3}$ の程度に平均している。

villani の *holding* (土地保有) についての性質、その負担といった、どの点からしても、*burgesses* という名称が、*borough* から生れたように、*villani* (*villain*, *vilein*) も *vill* から生れたもので、それらは、中世における典型的な *villager* として立ち現われた。それだから、*villani* の労働力を無視しては、経済組織としての *manor* は、経営を停止してしまわなければならないだろう。

こういった隷属農民の身分をもつ *tenant* の *holding* は、*virgate* (つまり *yardland* (1)) といわれた。従って、それは契約に基く農地ではなく、他のすべての *tenant* たちの間における *open field* の内部に分散する一群の *strips* に当る。

villani は、十三世紀には、*virgarii* といわれ、英語では、*yardland* といわれた。北部イングランドでは、*husband* ともいわれた。それでは *virgate* の面積は、地方によって必ずしも画一的ではない。持分の面積の広さは、十五エーカーないし八十エーカーの開きを示している。が、そうしたことは、例外的な事項に属するもので、地方的な土壌の肥瘠によって変化を示したものといえよう。しかし、おおむね、正常的な *virgate* としては、三十エーカーの土地を保有していたとみて大きな間違いはなからう。しかし、こうした土地保有につき *heriot* (借地相続税) の支払いが課され、また長子相続や遺贈が行われ、一般には、領主権に基く承認を要し、その *heriot* は、最上の家畜による *heriot* であることが必要とされた。なお、この相続については諸々の規定と制約が設けられ、ここに隷属民としての性格が表面に出てくる(2)。

half virgate (3) の面積を保有する者にも villain (*villani*) とよぶことがある。そして、これに対するものに北部地方で *villani* が保有した土地にして遙かに大きい部分に達するものがある。こうした保有をしている者の場合、北部では、その地を husband とよぶ。が、南部では、wistas といい、その表現はそれぞれ違っている。そうはいうものの、全体、あるいは half virgate または yardland 保有した者が、それに含まれる。

ちやど *villani* (*yardling*) と *cottari* との中間に介在した階級に、half villain (*half yardling*) がいた。これは、half virgate を保有するという点から、語源がきている(4)。

以上のような単独にあるいろいろの strip から保有地が形成されている耕地をもつ外に、おのおの *villani* は、牧草地、荒地、牧場の用益権も、領主と共に使用し、ちやどに宅地または農宅 (toft or farmyard) に囲まれた家屋敷をもっていた。

- (1) yardland は、yard と同じ長さの単位に対する呼称からきてゐる。virgate は、three fields (三圃農地) のうすに散在する 1 acre または half acre の strip (地条) からなる土地の保有をさう。
当時イングランドで、地積の単位として、hide が用いられていた。これも一定してゐなかつた。が、一般に、1 hide は、120 acres であつて、八頭の牡牛からなる一組を編成した。そして 1 virgate は $\frac{1}{4}$ hide であつた。
(2) 相続では、分割相続が許されず、一子相続制であつた。
- (3) Lipson, An Introduction to the Economic History of England, vol. I, p. 34.
- (4) Ashley, An Introduction to English Economic History and Theory, vol. I, p. 8.

VII *villani* の身分

隷農制度の下における tenant (小作人) の身分すなわち社会的地位に関することは、たとえ、最初は、法益上のことであつたにせよ、経済的な重要性を欠くものではない。結局は、経済的事情に制約されている。時と場合では、そうした tenant は、Common Law によつて訴えることができる独立した身分と権利を享有する自由民(1)であつた。が、原則的には土着民で、隷屬農民であつたから、不自由民である身分におかれていた。

villeinage という言葉には、明白に二つの区別があつた。すなわち、villeinage とは、土地保有ということばかりでなしに、それはそうした身分でもあつた。holding in villeinage とは、villein (villani) という一個の間をつくるのではなく、身分上は、villein は人格的に領主に隷屬する者で、不自由な立場におかれた。tenant in villeinage は、身分的には自由でも、不自由でもあり得なかつた。が、その tenure は臨時的であり、その賦役は、土地に束縛されるという事実から生まれ、不確定なものであつた。

villani が、人格的に不自由であるから、villeinage の明かな特徴である隷農的義務が生れた。そして、manor から他の地へ移住するための献納金を支払わない限り、逃散すると、引戻され、処罰が加わえられた。

領主の委意に基づき villani に対する課税額が随意に高低の操作が行われた(4)。

領主の特別な認許がなければ、estate のうちの家畜を減らされないよう、villani による牡牛・馬(5)の売却は、禁制がしかれ、また自家の水車石臼も据えてはならなかつた。これは、一組の石臼(6)を据えることは、領主にとつては一大利害関係に結び付けられていたからである。

villani の息子たちは、その領主の許可なしでは、in literam ponendis(7)(文字を書く)のも許されないし、学

校へも通えず、自由に手工業⁽³⁾の徒弟奉公にも出られなかった。教会へ出入するのも領主の許可を必要とした⁽⁶⁾。その理由は、教会は、その兵士または諸侯の施設であるからというのである。その娘、時には息子⁽⁷⁾、ひつちえも、隸農的身分⁽¹¹⁾の最も墮落的特徴であつて厚顔無恥な宣誓をとむなう *merchet* (*merchetum carnis et sanguinis*) という料金を支払うか、または、service of bloodranson を行つて初めて結婚ができた。このような *villani* の個人的自由制限は、領主に対する個人的服従の直接的結果である。

- (1) For the assumption of villeinage by a free tenant, see *Curia Regis*, Rolls, 1210-12, p. 117: *Deposit se de libero servicio terre sur in Ake burne et posuit se in Servizio vilenagii*.
- (2) Year Book, 20 & 21 Edward I. (*Selden Society Publications*), 40; *placitorum Abbreviatio* 243 a.
- (3) *Select Pleas in Manorial Courts* (*Selden Society Publication*), i, 16.
These fines might be very heavy: *The English Review* ixv. 778. The court rolls of Gimmingham (Norfolk) contain the names of bondmen paying *chevage* (payment made for licence to live away from the manor) as late as 21 Henry VIII.: Hoare, *History of an East Anglian Soke*. 252.
- (4) *Patent Rolls*, 1345-1348, p. 448; *Placitorum Abbreviatio*, 125 b, 221 b (*Possit talliare de alto et basso pro rotun tate sua*). But elsewhere occur the words, *tallavit ronabilliter Placitorum Abbreviatio*, 29 a.
- (5) *Placitorum Abbreviatio*, 85 a, 161 a, But in the fourteenth century the villein could apparently sell horse or cow; Year Books, 18 & 19 Edward III. (*Selden Society Publications*) 502.
- (6) *Select Pleas in Manorial Courts*, i, 47.
- (7) *Patent Rolls*, 1345-1348, p. 448.
- (8) A. Clark, "Serfdom on an Essex Manor", in *The English Historical Review*, xx. 482- Pont se in officio

carpentarii sine licencia; Posuit filium suum ad scholas sine licencia. J. Harland, Mannecestre (1861), ii 280-fine for apprenticing a son to a free craft (artem).

- (9) There words occur in a licence granted by Edward I. to a bondman to enter the Church: Patent Rolls, 1301-1307, p. 118. Examples of licences for bondmen to take Holy Orders are given in Hoare, History of an East Anglian Soke, 98. 450-451.

- (10) Examples of licence for the marrying of sons are (i) Patent Rolls; 1345-1348, p. 163; (ii) Rotuli Hundredorum, ii 845 a, 845 b; (iii) Customs of Battle Abbey, 67 (in certain cases); (iv) Year Book of Edward II. 1312 (Selden Society Publications), 121.

- (11) Compare Select Pleas in Manorial Courts, i, 94, where one was presented for refusal to serve on a jury; alleging he was a freeman, "where as in truth this sisters made fine for leave to marry". The phrase 'service of blood-ransom' is from the Mirror of Justices, 81.

Ⅲ *socmen* と *liberi homines*

全人口の四分程度を構成する階層に *socmen* と *liberi homines* がある。この階級は、東部、西部、中央の諸州では、それぞれの人口のうち(2) 二十七%、二十八%、三十二%、四十%、四十五%の多数を占めているに反して南部、中部の大部分では、全く存在していなかった。西部における *servi* が Briton と関係をもつと同じように、確かに、領主の *soc*(司法権)に服する者という意味をもち *socman* と *tenure* の隷農的狀態になつ *liberi homines* (freeman) たる Dane の移住と関連してつたものであらうと思われる。

Domesday 調査によれば、Suffolk と Norfolk の *freeman* たるは、人口の三十一%、*socmen* は五%、Norfolk と

は、いずれも十六%、Lincoln では *socmen* は四十五%、*freemen* は絶無だと報告されている。こうした事實は、調査を起草した Barones Regis ⁽³⁾ が、一つの州で、その隣接する諸州が、その同類を *freemen* (*freeman*) *たゞしばしば *socmen* と述べたことから、それにならうたと仮定すること、説明できるかもしれない。

socmen と一口にいわれる語も、実は著しく違っている二つの階級を内摂していることがわかる。すなわち、*manor* の相当大きい部分とそれに従属する *villani* を保有する者と、単に *virgate* あるいは *virgate* の一部分を借りて、村落共同体の一部を構成している者である。こうしたことは、Peterborough の *Liber Nigger* のうやに outcomes 僧院の支配する *manor* のため提供した証拠にくらべ、Domesday Book の貧弱な証拠から結論を導き出されよう。

だが、この二種類の *socmen* のうちでも、前者の数は、極めて少なかった。それらは *villani* や *bordarii* の隷属している大きな土地をもつ者として述べられ、推薦された *freemen* のよびに Norman Conquest の結果、それらを後の準マナーともいわれてよいものを保有している *subtenant* に変化するのを余儀なくしたが、その Norman Conquest 以前は、一層有力な隣人の司法権に服従していた *tenant* とは、少しも考えられないで、*land-owner* (地主)とみられてよい⁽⁴⁾。

しかし、*socmen* の大多数の者は、*villani* とは、二つの重要な相違があったとしても、それらと同じ地位にいたことは明らかであった。それらの者は、*villain tenure* ⁽⁵⁾ の最も顕著な特徴である。week-work (週賦役)という束縛はなく、ただ、しばしば軍役に従うよう束縛されていた⁽⁶⁾。しかし、それらは *precaria*——地均し、刈入れ

に加わり、また春秋に各自の犁(う)をもつて数か月の間、領主に対し補助的労働奉仕——をするよう強制された。*socmen* の保有する土地——すべての *virgate* でないが——は *common field* に散在する *strip* から構成する *virgate* で数えられるのがしばしばだった。

villani と同じように *socmen* は、土地を売ることもできず、また領主の同意なしには、*manor* を立ち退くこともできなかった(8)。

socmen の大多数のものは、共同農業に参加し、どちらかといえば、わずかに過ぎない賦役と多くの名譽であるところの諸義務を負担する村落構成員であった。こうした状態の起源は、かつて *Dane* の首領たちが、*manor* の家々を掠奪し、家来たちを *Saxon* の *villein* の代役をさせたことによるもので、このときの新入者が、農繁期には、喜んで、領主の手伝いをしたり、そうしたものに代位したと考えられる。そこで、一週間のうち、多くの日を割いてまで、領主に賦役の奉仕をさせられるまでには至っていないと考えられてよからう。つまりそうした隷属性が伴うことは考えられない。

- (1) Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*, vol. I, pp. 18-19.
- (2) Ellis gives 10,097 *liberi homines*, of whom Suffolk has 5344; 2041 *liberi homines commendati*, of whom Suffolk has 1895; and 23,072 *sochemanni*.
- (3) For example of *socmen* with considerable estates, see *Domesday*, i. 314 b (Yorks.); i. 326 b (Stamford); ii. 182 (Norfolk). For a *freeman* in a similar position, ii 345 (Suffolk).
- (4) There is an instance to the contrary in the *Liber Niger* (*Chron. Petrob.*, 164: "*Et ibi sunt xxi. sochemanni*

et operantur i die in ebdomada per tctum annum."

- (5) E. g. "In Estona ix. sochemanni... et serviunt cum militibus quantum illis jure contingit Chr. Pet., 172: on p. 173 the phrase "serviunt cum militibus" occurs thrice of socmen, and twice "cum militibus" only. On p. 169 there is a curious case of fractional responsibility: "Ricardus Enganie ii. hide in Hamtonascira et servit pro i. milite. Sed socemanni faciunt quantum partem militis, et ipse iii. partes unius militis."

- (6) Thus the *Liber Niger*, Chr. Petr., 158, records in one village only 8 villeins, but 44 socmen: "Et omnes isti sochemanni habent viii. carrucas, et inde arant iii. vicibus per annum. Et quisquis eorum meit in Augusto de blado domini dimidiam acram et ii. vicibus in Augusto preacionem. Et quisquis herciat i. die ad tremeis (in spring)."

- (7) Thus, in *Domesday*, ii 317 (Suffolk): "Huic manerio pertinent V. sochemanni de LVI. acris... Hinc. non potuerunt vendere terram suam nec dare alicui;" and ib., 324, "In eadem i. sochemannus cum XXX. acris et non potuit vendere nec dare."

- (8) Thus, in *Domesday*, ii 66 (Essex): "Isti sochemanni, sic comitatus testatur, non poterant removere ab illo manerio."

結 言

イギリス身分法史を追求する場合、中世農民の法的地位の究明を行つてくると、ここに中世階層における諸階級が、それぞれ法的にどのように地位付けられているかを規定しなければならなかった。そこで、農村社会の生産関係において、中核的な生産担当層を *villani* 群に求められたし、それらを領主が土地に束縛するため、幾多の身分的制約を設け、断えず中世的収奪を行つて来ている。この生産活動の花形級が華々しい姿態——たが、酬られることの微

少な——を示す蔭に隠れて、最も劣悪な社会的環境にあえぐ *servi* に、時には焦点を合せて、道中を続けて見た。かくて研究道中の振出しから最初の一里塚が、こうした稿となったのである。 *cottarii*, *bordarii* などの並存している層をも探って見たし、*freedmen* にも当って見た。

だが、なんといっても、*villani* 層を明確にすることが、必要であるので、この点に多くの論述を費している。それは、今後の追求の礎石を確実に定めておこうとしたためである。なお、本稿は、あくまでも、中世イギリス身分法史の研究途上における、基礎的構造分析にあるので、社会経済的究明を多く採り入れ、法のよって立つ地盤を描くことにしてみた。しかし、身近な日本と隔ること遠いイギリスの、しかも中世の様相の究明は、徒らに心焦りつつも、資料の鮮明にこと欠き、時には思わぬ理解の偏るのも図り難い。皆様のご教示を賜われれば幸いと存じます。末尾ながら、ご指導を戴きました恩師ならびに先輩各位に謹んでお礼を申し上げます。

〔主な参考文献〕

- Ashley, The Economic Organisation of England, 1939.
“ , An Introduction to English Economic History and Theory, 2 vols, 1919-20.
“ , Surveys Historic and Economic, 1900.
H. C. Darby & I. B. Terrett, The Domesday Geography of Midland England, Cambridge univ. press, London, 1954.
Gomme, The Village Community, 1890.
Gras, An Introduction to English History, 1922.
Fifoot, English Law and its Background, 1932.

- J. L. Hammond & B. Hammond, *The Village Labourer*, 2 vols, 1948.
- Hasbach, *An History of the English Agricultural Labourers*, 1920.
- Kosminsky, *The Hundred Rolls of 1279-80 as a Source for English Agrarian History*, vol. iii, 1931.
- “ , *Services and Money Rents in the Thirteenth Century*, vol. v. 1935.
- Lipson, *An Introduction to the Economic History of England*, 3 vols, 1935.
- Maitland, *Domesday Book and Beyond*, three Essays in the Early History of England, 1897.
- Pollock and Maitland, *The History of England Law before the Time of Edward I*. vol. I. 1895.
- Main, *Ancient Law*, 1931.
- Seebohn, *The English Village Community*, 1915.
- “ , *The Evluton of the English Farm*, 1927.
- Vinogradoff, *The Growth of the Manor*, 1920.
- “ , *English Society in the Eleventh Century*, 1908.
- “ , *Villainage in England*, 1892.